

市川追善数珠親玉
完

中村俊定文庫

文庫 18

1031

3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33

市川
白猿

追善數珠親玉序

中村
俊定

市川五代目團十郎ハ。幼名松平幸藏。十四歳少テ
初舞臺。夫々中幸四郎。のち小團十郎と改^{くわい}名^な。
俳名^{はいな}氏三井とよぶ。もろゝ^{もろゝ}。鰻藏^{うなぎざう}白猿^{しらくま}也。更^{さら}ニ事^{こと}
座^ざ墮^だとつとむる。享^{きやう}二十八年。五十六歳^{ごじゅうろくさい}歿^まリテ
一世一代の名残^{なごり}と法^{はふ}とあり

おしやうの時ちりてあを世乃中れ

花ももろも鼻もけふれ

孫新^{まご}之^の勳^{いさな}にえび花^{はな}の名^な氏^{うぢ}讓^{ゆづ}つ。七左^{しちざ}也^{なり}と改^{かへ}。



功成名遂くつりしは。立百崎よ草菴と結び
月雪成友と先陰ををうぬ。されど中村座
顔見世後者不連ふこと。才光井半田郎頼
より中村園十郎當場の口上と述るれり。とある
いふこと。出て日毎に狂歌一首づつ誦座附
口上極月中旬より大入繁昌す。然るも園十
廿二方より世と俾るれば。先祖の百目見成
幸よ。孫えびき。十キ小成る。園十郎は名成
あえくる。芝居は座を具負乃友ら。のよ
い。幼年あり。市川一流の俳優。孫と傳へ
ゆ。又先祖への追憶ともあり。人と勸るる
順ひ。市む。河原崎は兩座へ二度の白見世
此大入世より知を以也。また又閑居ふ
引替。うらび高金を積と。いども。是ふ目
を。ふ。戯場の者頼。来ま。留注
春。戸と閑く。人伝通。壁に狂歌一首
と。る。

芝居居るもの。つ。も。あ。り。ゆ。り。ゆ。り。

松が。冬。む。け。竹。が。山。由。う。り。

梁。父。の。吟。よ。あ。り。み。ど。即。童。は。志。と。り。ひ。

不奢不貪。珍器珍味成得るといふも是と
人母と云へ。一椀の飯一杯の酒陋巷に住で
賢杖と樂しむ數年。こと秋の比が中
あつた例あつたとする事公玉本屋のつや
の二人の娘は我々といふるあひ。醫
料と盡しわらうとさうさうさうさうさう
すもろが道あつたべ。とある狂歌俳諧など
いふつとく慰もものも白猿病れひやあ
ける時ふらから筆とら念佛百首といふる
狂歌といつちて。友とらへあつる。後に徳
待人あまは成得く。はまのひささあつる人ひやあ
櫻本よものて念佛者よ是は恵まん
おもへど。は忌々敷やおのひ給んと言
しつると白猿聞くと悦び。給つとくは物に
生くハ祈禱死してハ菩提の種ともめ
づくとくを需よ存す。時十月廿九日
白猿。風舟あつる川雲は行末ハ吟び
物にうさつらる。は向よ辞世の心あつし
うだ。其夜雪より殊よあつたさうさう
いさや例の俳諧とらとく人とくといふる
と集あつぬ。

此顔見世孫因十郎。上総の七郎景清の後
めく赤くわくたぐ荒る中れ出立を賀す

顔身整や二井樽うらむる艶

とりの句せ。まゝるる表月お座まぐすえ

つらくは月ばうらして丈一産

此跡つけしつひく。あぶし終りするや

見えしつがづへあきやへまあつるまば。くや

たえ入ふけりて。嗚呼終の道誰もかくる

つらきあどあうらな。人念念定慧あり。

臨終告乱まんとあし教むべあるうら。

曾子死するふ及ぶ箒と易子路鬪死する

及く纏はむすびく。顔是皆平日誦得る事

死生と見ること晝夜のごとく思ふが故あは

誠や波斯國の人常々山水と愛し死して

真心石のごとく開ハ中毎山水と見る取れ身

あり又一人の僧禅觀法瓜行し死するより

及く大葬を心の内觀音の像と包とふ

是皆惡するはよまあるる我國も佐國が

蝶と作らるる此のうら教ありさるる百様

追幅のため狂歌俳諧の好士一草一花

とうりゆくばとみふ櫻木よまうてかの念佛
百首とよふよ出 數珠の歌玉と題して
一つ巻とあし是を靈衣と備ふぬちあ人

東都清誓作者

立川談洲樓馬馬述

風よ雨と河とくハぬあ子顔は

あま中とうとくしやあまらう雲

おあしとくしとく

ゆく人ま鶴の林し驚か山峯

あま中とうとくしやあまらう雲

市川寺白猿和尚述

念佛百首

自筆獨吟



くまの

よる

くまの道

おらん

まろふ寺の念佛の

右 市川白猿辞世

豊國車

くまの道ゆくすの比が水舟の病り
 あやとら地獄ぬぐあいなむらこ
 ちのあつけあそびあまの物たてて
 ろのいそゆらんあ病中の物くぬま
 下宿さよふるそをひらう病して
 枕とて真どゆりる

市川白猿

白猿和歌集

所掌十二の世佛

孫孝一切諸菩薩

陀^と今^い金^{きん}の^の中^{ちゆう}に^に經^{きやう}

啓是あきこ^この^の如^にく

る古^こ店^{てん}白^{はく}姑^こ

とる^{とる}り^り
相^あ海^{かい}姑^こ

い^いく^く身^みを^をん^んの^の藝^ぎ技^ぎ掃^{そう}抄^{しやう}家^か

法^{はふ}と^と真^ま如^に此^{こゝ}の^のあ^あら^らま^まの^のあ^あら^らま^ま

物^{もの}を^をら^らん^んを^をら^らん^んを^をら^らん^ん

何^{なに}の^の物^{もの}を^をら^らん^んを^をら^らん^ん

秋元乃の百集通波級ちかを好ま

地獄じごくの海へ使もちつた

的てき年ねん月げつ日にち念仏唱ねんぶつとながえて死しおるら

終はつりのおのゝどころところつつままりりれ

念仏を唱へ地獄じごくの海うみを好このむ

法然ほにん様さまがが見みててままごごぢぢりりぬ

念ねんふぶつつをを唱なぐぐるるをを好このむむ

心こころししままししてて死しななすすをを好このむむ

念仏で助る家おぼつかいおのり

まゝ念仏はかゝるまゝおぼつかい

しんじゆんじゆんをたすかひ

しんじゆんじゆんをたすかひ

念仏を米の飯へ添へるちりぢり

著るしんまゝに生得せいとく百ひゃくなり

あつちのたすかひをたすかひ

あつちのたすかひをたすかひ

除陀仏を唱へん人々を讃ふ

とるえぬ人々を讃ふ

物の見かたは時をたす

南無阿彌陀佛

朝あけは花をみよ

唱へん人々を讃ふ

あまのこゝろを

はなして

よきおのゝこゝろに
おぼゆる物言ひを
たゞしき心にて

罪も軽んぢ
たのむ心にて
おぼゆる心

亡念まねんの
こころを
おぼゆる心

おぼゆる心
おぼゆる心
おぼゆる心

十美の
徳を
おぼゆる心

おぼゆる心
おぼゆる心
おぼゆる心

よきおのゝこゝろに
おぼゆる心
おぼゆる心

おぼゆる心
おぼゆる心
おぼゆる心

ゆゑに世に生かすは

念佛の中を

文徳と名利を

常の大醫を戒

的を念仏の精

油をまると

けしきで

念仏を

し
て
は
な
ら
ず
も
の
ま
は
ら
し
め
ら
れ
し
ま
す

乃
ち
ら
れ
ば
あ
ら
ま
り
の
ま
は
ら
し
め
ら
れ
し
ま
す

あ
ら
ま
り
の
ま
は
ら
し
め
ら
れ
し
ま
す

聖
人
の
ま
は
ら
し
め
ら
れ
し
ま
す

あ
ら
ま
り
の
ま
は
ら
し
め
ら
れ
し
ま
す

孝
^{だう}
^ま
の
ま
は
ら
し
め
ら
れ
し
ま
す

あ
ら
ま
り
の
ま
は
ら
し
め
ら
れ
し
ま
す

念
佛
の
ま
は
ら
し
め
ら
れ
し
ま
す

Handwritten cursive script on the left page, consisting of two lines of text.

あて すなは
苗推量 の 心 を し る 事

Handwritten cursive script on the left page, consisting of two lines of text.

Handwritten cursive script on the right page, consisting of two lines of text.

あて すなは
苗推量 の 心 を し る 事

新あらのち孝うやまつらるることをしることは外にあらず

〜といふは何んとも世よにあらず

至いたる人の心をたとりて一にすべし

無なしといふ人の心をたとりて一にすべし

至いたる人の心をたとりて一にすべし

念ねんにあらず人をたとりて一にすべし

信しんにあらず人をたとりて一にすべし

只ただ念ねんにあらず人をたとりて一にすべし

心こころをを念ねん念ねん也なり也なり

はは極ごくのの心こころ也なり

念ねん念ねん也なり也なり

心こころをを念ねん念ねん也なり也なり

念ねん念ねん也なり也なり

心こころをを念ねん念ねん也なり也なり

心こころをを念ねん念ねん也なり也なり

心こころをを念ねん念ねん也なり也なり

後今も親の法恩を子に世も

死しては行をも南無阿彌陀佛

亡念がては念だんをうけしむ

~~~~~

欺だまふるを念に習ふ人

居るをくあんまん連ん登ん

念の心を念に習ふ人

~~~~~

成れ様けんら乃はるく多摩ま

殿いの御まの御まの御ま

弥彦公の唱ふる人の御ま

己あま無な事ことははるく

一遍乃念公の御ま

御まの御まの御ま

總しんの念公の御ま魂たまが

生なの御まの御ま

念仏の心をせよと云ふ人あり

人もたゞ念ふをせよと云ふ人あり

念仏と他の子の心とをわかれぬ

猶ほ心もわかれぬ

寝^寝て坐^坐して一^一刻^刻もわかれぬ

口^口を^を閉^閉じて心^心を^を守^守る

念^念ふ^ふ心^心を^を守^守る

只^只念^念ふ^ふ心^心を^を守^守る

神道も儒道も祥子老成も

まむいさしあむ皆さのり

念仏でういぬといふ聖徳太子

己魔印乃れんんん

念仏と忍智下相の秋

あくがらんゆくぞさる

強陀仏の唱也魂

少のたえ不焼あ所溜

宿^孫の久し又もあまの念

習ておぬえあふまぬ

情^たけしきもあはれ

七月のあまの念

歩^あひてあまの念

こころあまの念

念のあまの念

あまの念

抄

一人で忽まさか浮む念ねん佛ぶつ成なり

唱なまく只ただ内うちれれ又また一ひとつつとと

念ねん仏ぶつの目め子こ何なにの海うみ人ひとの心こころもも

心こころももかかららしし十じゅう六ろくのの心こころ

念ねん仏ぶつの心こころももかかららしし十じゅう六ろくのの心こころ

皆みな一ひと蓮れん乃のち後のちのの身みももああれれとと

念ねん仏ぶつの持もちのの宗しゅうももたたららししとと

人ひとももかかららしし十じゅう六ろくのの心こころ

抄

念のま唱くわぬえ我のま
しつう一夜の極の糸の油く

一節の念の唱くわぬえ
知ぬう西の山にけぬ

いん
減いん方いん茶いん葉いんうも念の

意のの極の極の妙薬

空のま孫の池は多てこと念
いん

まのまのぬるれ中

退^{こい}辱^{くら}の念^{ねん}がねが^ねれ^れ邪^じを^をせ

久^{あき}の中^{なか}へ交^まへて^てい^いま^まの^のし^しよ

多^{おほ}欲^{よく}れ^れ垢^{あう}と^とは^はほ^ほあ^ある^るを^をん^んを^をい^い湯^ゆ

首^{くび}あ^あへ^へら^らと^と蘭^{らん}華^かを^をい^いま^まの^のし^しよ

念^{ねん}の^の多^たの^のし^しよ^よを^をい^いま^まの^のし^しよ

ヤ^やス^すん^んが^が梅^{うめ}い^いあ^あれ^れし^しよ

一^{いっ}ト^と寝^ね入^いら^らぬ^ぬが^がら^らん^んを^をい^いま^まの^のし^しよ

こ^この^のし^しよ^よを^を梅^{うめ}れ^れら^らん^んの^のし^しよ

14

まらやめる神の國の序を

しやにける西の

まらやめる神の國の序を

しやにける西の

まらやめる神の國の序を

しやにける西の

まらやめる神の國の序を

しやにける西の

15

念の心を念の心にして心を離れ
除く後生を母の心にして

あすの心 あすの 念 の 心 を 母 の 心 に して

かゝる心 を 母 の 心 に して

念の心を念の心にして

念の心を念の心にして

念の心を念の心にして

念の心を念の心にして

今公の御事
御事
御事
御事
御事
御事
御事
御事
御事
御事

十一

今公の御事
御事
御事
御事
御事
御事
御事
御事
御事
御事

十一

今迄の事々々々々々々々々々々々

今迄の事々々々々々々々々々々々

今迄の事々々々々々々々々々々々

今迄の事々々々々々々々々々々々

今迄の事々々々々々々々々々々々

今迄の事々々々々々々々々々々々

今迄の事々々々々々々々々々々々

今迄の事々々々々々々々々々々々

念心いし海のうらみ
いづれもあはれなる
あはれなるあはれなる
あはれなるあはれなる

あはれなるあはれなる
あはれなるあはれなる
あはれなるあはれなる
あはれなるあはれなる

十一

先の世に於ては

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

念仏の心死出乃道連

念仏てお願ひを申すに
まことに通じしと梅宗の
名をあらうと云ふも
念仏てお願ひを申すに

花はたつと云ふに
念仏てお願ひを申すに
念仏てお願ひを申すに
念仏てお願ひを申すに
念仏てお願ひを申すに

念後口傳の事

外外より何何もああららず

南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

阿彌陀佛の御願の如く
お念ふて下さる人も
お念ふて下さる人も
お念ふて下さる人も
お念ふて下さる人も

阿

市川寺五祖

白松和南

行年六十五

石見
おろし

文化三丙寅年 葬^ル芝増上寺中常照院
還誓浄本臺遊法子
十月晦日 俗名市川白猿行年六十六歳

市川白猿

市川の泡

親^クう^レぬ^レ玉の

ま^ニら^マさ^シら^カさ^ト

心のかい^ハる^ル顔^ハ味^ハの^ハあ

鳥居清長筆

極楽の御座り

さる

送

と

十方位と

あつてはる

無名山



我をいふるもの父母
ワレと志はるものいひて
うらむるものいひて

六樹園

琴以とつていふるねいかに
うらむるものいひて

はる荒い花のあひし何人の
やちつていふる戒名

病床母見舞く又逢ふまじきも
さうばといひたるが名跡とぞありき

牛多楼

嗚呼はづもたうくうかばるぞあは

恒成

かゝ申のものや

南無阿弥陀仏

念佛百首は功德ふは二尊未迎り
雲とびえ九品蓮臺の往生もあはく
おろえく

塩屋

不浅

笑の雲が西うくあふりく

定よまわりの花乃江右子

たのむはくもあつても坊があん学は
おと成田乃五代のともや玉

千年

笹丸

西方へ登りて後者うあしは画の
うらみ乃すぐい見くも目とまき

連坂

関守

西方の顔見世せ居あふくふと
紫摩昔々金丸千両あくく

麓

雪舟

世の中は秋狂言とるぬゆも
床殿入御國へ君う顔つる方

芦の屋

月守

浮世とはまの今日と舞おき
すくく浄土乃蓮乃座頂

谷松

年久

一連の珠敷とありあり一観を成
きくよきと葉もくうくう

連松亭

知ら住

君ら若くハ五づけれ素袍を
わづめくはるる袖もくうく

七葉亭

梶磨

暮みりして死出の山裁す人ハま
まきくハゆうく引くくふ

茗荷

為成

花道と二河白道とまきくゆ
く成とくまよまきく

鶏鳴舎

関守

羅薩ま玉蓮の花の西の下
く極まのくくや入して

板屋

守常

くまきくもま成いつまど座願の
まの今日もくはきくりのと

筆の屋

油成

極楽へ雪の花道はまきくゆ
とくくくくくくく六十六部

秣

仲成

まきくくくとま成る道まお大ま
みまき世乃別くくま成

浦内

兼吉

く人軍人のうわらま賣やつとむん
手成の菩薩の仲る入して

奈部

純成

大太方おまのれハまきくくも
まきくくふま成れ成なるく

山田

早苗

まづさうくハ総坊主毛引くさふ
掃乃事お袖の尻出乃けりけ成

有輓亭
内成

かゝるるも毎常は風乃あづた
何つづもあいらねどもちりけお

素繪堂
瀧津

上品乃カソち川と夢うん
志す黄金乃彫成ぬぐまき

東西
南北

極樂乃座うらとある白猿と
さうくくくとさむ大和魂

便々堂
仲澄

まづさうくと勤一人ハ土下
船坊主もむんや出ん

一寸
法師

あは人お手向乃水やうす

川越樓
繁女

風巾し涙あぐりけ糸抹香

同
通女

うせあぐりもさるも寒も傳

同
照女

さし出れ風の家あかすと

文亭
一通

まづさうく
鳥も見ぬをさうくりに

うらやめの中今土がくんとさあけり
我一夢と見る古唐あ

福州

千雀菴

あははづもあはぬ影を志づる
生うけりし画よこすやをうら

繁見

如月菴

面影や火桶しはる灰の跡

馬犬

子救菴

おれおれおれ画ふる平海を
月影をうらやめし手う追善

矢藤

護南堂

君があはれをうらやめし手
さあけりし画あはれし手う追善

眉住

志づるはと夢をうけつるが縁

金井堂

丹盛

おれおれおれおれおれおれ

眠蝶舎

夜鹿

且那寺人成金とよの悪衣も
今もよめしうらやめし手う追善

はなはれぬゆりうらやめし手う追善

鑑渡西樹街

四時樓

夜格

周の代の時あつてよど小世日
命の怒と拂しとすれ

親玉の今もよめし手う追善
誰のまづりしと出づる本づく

犬丸太

ふと十月市川白猿白日のうらみ辨して若泉
よおのゆく梓芝居一臺の裁場をして実多論
むろぬあはれといへる西夷の若く英名は志る
大言はるはる白猿のまゝ園中よりいれり人既に
日本の力きと極はといは質考子述く美終り
人よん勝るはり吾友豊川終海楼馬の若ん
わくくといふふあり

和歌身

酒月米人

白き多志さるあめ世のりん

十月のりん

十月のりんと市川白猿

りん

杉桑亭

恵門造

あつとむあつとむの西方の

蓮の舞臺よのり花さき

八尺長刀持素袍 御家出立鼻丸高

休言極樂鼻負少下諸佛亦閉親玉號

上る亭賢連

得脱の身とありて出せり出の

をちの巻りけりかあり

吾子軒撫彦

西山子あり川きびきくもえんみんかへんよひがしん

大河迄千祀

あふふ今つひにみ嵐本戸白猿おしとすくもつてふ

甘草亭甘露

淨玻璃子楸の素袍のうつり耐強いねせん闇六十五

川上亭

大船のとまりー海光の雲もでる闇六の體におろるる

杉折入

ふあれ人も涙の目をまらく白猿主の永代らるる

新 糸丸

世中のまらり納まりとる大乗妙典六十一部

机本日物

とらまら内ちりてこそ白猿うとれも其名もさうす

望月亭秋三

社神の物おしとて妻芝居も我の深日新しん侍

春長老人滝成

彦登の一枚とらるとめとやの物も多おあふふのあ

都亭辰巳

市川の五世子六字の百とて千本くらあふふとらるる

市川白猿六十五巻までをさうりしは悼て巻十五の
序へ申あはれ

夷曲亭

洞隠酒舩

其年にも十六部志ては猿

長く無言は幕を形し

顔もせの以市川白猿世にさうりしと聞かす
くつろしきる

百花園

大船洞丸

さら更のひ糸のあきつるも白猿

今や世に存の存はしせん

白猿もこれ教へて世人のつらき

いふまじし

蕙風亭

汗留夏任

ア、これどもあはれ真人の意向

真人の目録さうりし

周正様をかきし海老もさうりし

の影もさうりし

千鳥亭

紀 廣任

錦繪の十遍さうりし念佛の

一遍に帰し教珠の釈玉

志小月をのりてうまふ人ありて江戸繪成りつる
やまごて白猿成りて 十八年

梅戸

海珍と江戸のかきみかき

環球人も船目そらく

市川白猿祖上より五世その名とくしては若く泉の
鬼とあるまはるる 人日亭

若菜田平見

釈玉のかぶのがさらの座落

目さるりかうりる海舟こりり

白猿といふもき

まぐろの市川流のあきりハ根の園座れ
園まきも 心ひりてなれ 浄玻璃をまがさるる
大芝居 園主宮 志づくく 天王三の
さくらん 十まをれ やのれ若荒 大谷牛
河あつ鏡 赤鬼変れ のりま玉子 笑きささる
まきても 今より海ハ 大船より のりれ
心しやせり

及歌

年々新稲葉

大木刀と扱と海舟北の心めなる目が鼻も地

○
千代まぐさの江花と見
おや玉つづらさちるぞとみえ

木の
景吉

称名氏らふふ六部乃死出の旅
くすすや蓮のそ那は白猿

入手
倍成

十露盤乃玉乃涙きつがれ
目くらしくし我ももるん

手下
商人

あま世成らりや六千六の
めぐりとすいとくよはうら

相引亭
嘉住

うらむまは経より中乃蛙が
うらむまは経より中乃蛙が

始太夫

艾屋乃三升は紋をとるふつ
よもはたがかりしきゆかあ

有賀亭
琴成

つづもふく遠の御國ゆれ
こやするまさくあやま

會津楼
持吉

まおく後玉いあせどもその中
たにおや玉はなまどらひあ

古柳亭
枝成

○
白猿の浮玉守あひ隠居して
くやし十編んよ極歩くゆく

水邊亭
船主

おの猿の才うちをぬくまき
おの猿の才うちをぬくまき

正梅亭
甚方補

市川と世よ名もなきるるるみ
久あゆみ人のかりけりゆを

玉川
六圃

白猿ハあきむまきも水晶乃
光るる後のこすし珠教の親玉

舎楽多
友也

親玉の玉は後代も川の珠教は
くらととりつゝあきむく斗を

寺月亭
土佐翁

見物のこゝとあひしゝ心知る
くらと白猿とどくくあは居る

奇妙亭
水と禮安

手向ぶらぬあはるるの市川は
くらと白猿とどくくあは居る

榎
枝炭

二升も孫あゆつる市川の
志せりけ家ハこせりまどや

蜀江亭
綾丸

精とりの海老ともよびるる此
いくへい色のあはるるあは

豊
事成

○
偏祖右肩ハ落るふあは紅蓮の
花も種ハ枝敷よかり羅漢臺より
弘誓乃りりやのよあきむく白猿の奉
送とあまんと極楽降土ハ文入あは

奇南樓

蓮の花は庭に白猿の
くらと白猿とどくくあは居る

香保苗

くらと白猿とどくくあは居る

志づゝくはうらふはむしてふふしや
みきり乃風の引きくり

○
枕花亭
路蝶

志づゝくやあま切は世ふ後田を
まひ今日ハ殊糸乃おや玉

ニ味
一七

色づひ葉ハ西の昔居くむより
しりの枝まへ我もゆきま

菘屋
裏住

瞬しおもけきりし侍あし
隈とらとも霜小肩さうしすん

嵐
西羽

暫くともさうも風のそらもあし

末成

○

安州年

をひさきさうし比
とさふたりとらた
さうらひたりしふ
扇ふらうらま
とさきさ
侍らりま

扇ふらうらま

古筆とある田やの
あまきりくひんきりとも

後ありくらま

彫工
悠々館侍人



夫市川白猿六段藝乃教主ともいふ一微妙の
音多舞基此椰子高座より崩本石よ
びた敬白のせり如ハ諷誦乃之寶衆僧より
叶ふれど汝羅双樹乃時素ありては世伝の
世へうえ紋乃老の林よ入るんか我が先生
馬馬市川一流の狂言よをく追幅の考
うり人々によをのまこ棧支たりしより
眼くらんを此春太郎油むい乃轉法輪
知らり振の等極朱東門忠臣講談の
蜂は巢よとらよをくらむ西伝おひ出て

ワびとささけ

由良ふもあけしは世より

すくふくらすやゆみさるん

枕亭 柿人

○小の島八男立の衣裳
脛の下に赤とおふ人五人をうす十六とく
あゝぬるいあゝりー因十郎とてそく

千里亭

北敷風

追善の為朝あまをわげりこり

おいさハワもも同ーささの葉

里洲

志づくは本地も甚るお人堂

なりやど坊まハ延危乃おひりそそ

○助六のうらうらハ延危は御光と
わらう尺八が人のうらなうら

奈良部

數有

紫はそのをらちたハ

再一乃雲

ふあふのまのやぶく

六十景

春好左筆

自得菴
花咲翁



こころざしを

こころざしを

母垢世界

ともも其の移りも

とささる

下徳園様嶋島ちりう記
成田や七左衛門木名

楠生亭

英洲

将門と呼ぶぞ

けつこえび白猿と

六十とびくまんとりて草帯

お達者ともよめお女と思ひが
かた志樓

金馬

鷺のけりしも雲さうり
虎のけりしも雲さうり

立川

談笑

市川の親玉可おれ其善彦
西へ入りたる日向日景情

白猿傳

砂邑亭

文好

光

久乃根五郎此

さささるる也

初めしゆく駒

くも時宗

かきまはつる川を系揚し世邊送
是も市川五代二郎

下徳 銚子
天久

○ 志がくくときしる後乃目くらく
蓮はくくときしる鼻乃顔見之勢

水魚菴
魯石

○ 親方をひ川とて魚はくく人ふり
何さおき人とてまらるるおくらく

治呂菴
魚徳

○ 箱根山ありぬ常照院小惣後者
くくくくくくくくくくくくくくくく

鳥亭
陽馬

く川とくい生死流轉の雲晴て

二重舞臺よりすたる蓮葉

牛島乃いりりさるるも出のひ出た
あゝ名体と〜工藤も〜

御足袋所の女
うす掃式部

俊實一人の地へもむくとハ

鳥亭

西へゆく風も弘誓言は船よの〜
銭と〜つふと〜べどうひふ〜

要賀

後も嘆揺もあらむ世乃中
何と〜松まついり〜ちととも

藤二樓

鳴神のをもとに候乃大なるを
けせ乃後連のきほく〜ゆ〜雲

歌川

豊國

大江乃とま〜十番億土あふ
極海あ〜ゆ〜拙者親方

二代
花乃のつら
市川新車



白猿蓮の花道丹座して日冬至今晩
二七即席俳諧臨終まど狂歌門院の
別荘成田屋七菴と〜我伴徳居當
年つた川〜六十五いふ人と弥院極ま
えあ〜とやムリまぬら

頁菴

閻王も牛頭冥官も

卷上則次

一トあ〜み

極樂世の心

ゆふは顔見勢

○唯我連

つがもふふの早馬阿房羅刹が
うふふふくとぶくらくわ道

兼弓館

真星

栄菊園

三子殿

初雪とほり雨とあり田や乃
きくえくもわをさむ人をさ

カフサ
松尾亭

守門

あひさや九十九躰の海をけり
ふふ白猿の逢ぬべいとハ

山亭

小松

かろまは位世とりし島と死生の旅
おく楽人ゆい今もあり田屋

二州亭

百乗

今世とんげんを伴とあり田やの
たれれらりふりより上り松

並松菴

音成

まろしたまふあとも年北市川の
こゆとまぶとくくのこる組り

有竹窓

屋烏

玉乃緒をみまは結くみ山吹の
若ふる白ゆみ袖ゆりすあり

○ 吾人まは帳元十士の仕切場も
そらしたくを上品上生の佛も
うごころをさめや

唯我堂

川面

白猿ほどの極らくへすくらと
あはくも倦る具る目くく鼻

○ いちへ一切経をたぬるハ三藏法師
今臺庭は子と戒名とたふ

かつ

北齋

念佛の百首はよみく西遊記
孫悟空あまよきく白猿

○
反古畫のま白猿世をまがく〜
あし 毎常の風が吹く〜
冥途の入り者〜
我より〜
翁の一世代〜

世の人をむむも 鸚鵡齋貢

あどなう〜田至〜浄土へ〜ゆく

幾〜む〜む〜む〜む〜む〜む〜

百了乃遍の數珠の觀玉

白猿世を〜
東東南蠻北狄西戎 月池 鳳来山人

○
うは箱と〜
まの〜

楊柳亭

い〜
顔見世〜

○
名〜
幸崎屋 幸崎

ふ〜
あ〜



菱川
宗理

夷川

一と刷毛

八百八所
時初状

冬牡丹名多る地花ハ
 顔見世乃うけも
 大古刀も深窓さるも
 玄い道いなるうもや
 写しでもう川
 大川雪也
 まいゆるとハ知るがう

百二
 五陵
 葫蘆
 貫太
 春好
 菱川
 宗理

眼をばさる

新場連

外良うらむ乃取中か

川旭

おかしあや

百万遍の霜はあふ

泉舎

かたふんせり

夏の六十ふ部う角

海川

とららくの

眼をばさるうらむ

若鶴

隈がアヒ

さおもうまやを牡丹

百砂

大鷹鳥

西へあひりく

紅蔦

ちふふ

初おしより

百龜

わ

ふつあふ火桶

菊明

ま

苗のふたなご

百慶

我

華も後のふり

清長

そ

付中見せふ

岐山

顔見世中

座組ハ奇な

星川

○十月廿九日病奄母ありて
風寒しう空も曇りてあつて

風小雨と川雲共

白猿

行来り事

らいつ事持ひゆる父のいづまを
おのひて

常母まきく入相ふら

時雨の舟

茶山女

父別と云ふにのみ

風物もいづれぬ

ゆるる舟

三井三井母
十とみ

友小島あさたのづ

夜とあけはる

茶井

うすひも

涙くくり

三井

鏡了靴

室くさく

梅見つ事ても後つ番

吉之助

みくらこ

霧よりゆらけあはれが

半之助

形とのせが

ふらとじつうへの時空が

春曙女

母啼く

鳥も志しき人やある

た川

まくし

つゆふは消る道ふら

柏富

みぎはふしはる松くへ時雨が
思をうめあふぬみ皆あふ

錦升
杜若

大いふふ打き川を根乃を特
埋火也あふととくどきゆは

高賀
新車

る古菴壁を成又るあふ財
用中し梢のうみもとら

薪水
錦車

松くへも力をあふ也書け作

仙臺
徳辨

きえりふゆり名は松のりふ不二
海魚をとりふしやちる紅糸

秀佳
路考
路曉

行雲や又とくはぬも月
極楽乃は教見世中銀世界

臣撰
曙山

丹たある紙子は方打破き
景清き日とも西山也枇杷の花

賀朝
三朝

ちりやらの室よあふり花の見

浪華
市紅

引はや遠く十うじよほり
ふあ思あの人をうすき
青舟のこまきとあふり雪送

珉子
中車
初朝

六の道十方世界む川乃花 馬十

○ 松隈のあやぶ

盧笑

顔見世やちりり

松下

彼岸よりあやぶ

集道

○

とやうくも

江棟

初もやが記

江鷺

異國をく時雨ゆら人西乃雲
霜をさしうらほ今や水仙花

萬器
機夕

夜の太鼓ハハと小きくあやぶ

ワビくはつつきあ髪と故人
栞筵の吟しは侍れ

于丈

顔見世と明日日ごと

野もくく煙も余ほの

尾陽

桂五

○ 白猿死してみ本立とぞ

今 士朗

あふふまゝ

追悼

屍焼猪人



あさあとも

庭ふかひの

田字茶

いしと名は

成田金村

菴



日本ハ初らハ唐カキクハ記ス

行年と云フ

六十六部

真那板

橋彦

武州深谷

北野亭

千本

御具ハ肩ヲカハトソク

親玉乃一世一度也

あつ

とらな

全 中山樓

美十人

大太刀持手あつ今ハあつ世
人少も様をさぬさるに

らうふしやすし何系母付成
ゆいし今ハありやふしと

望月

志良史

極赤乃花道をゆく旅立を
まじりまじりくくとやのふしと

雁首

強喜

さくら園へ名ハらくさふさ市川
このあしりしやあぞあしり

越中富山
豊

年雪

一生乃名らく母花をゆくせり
親乃ゆづりけりふしの親玉

山々

春風

珠散乃親玉の株とハらくしに
ありてはるまじり世のかりと

紀

東

極楽へ入るりたりん附も
かぶ乃菩薩乃座うららの又

便々舎

炭方

親玉おたまたま向乃牙ふあむ
うむはけりめらりけり

便々亭

真影

極赤乃後者とふらととも
やらくし蓮乃花乃座うら

郷時雨菴

空琴

まじりくもあね未其は白又喜
えんまらうけしさをえん

玉光舎

占正

智とあしりとうあてもあしり
まじりくもあしりしさをえん

便聞舎

物成

極楽へさへもわらんきき名ハ
世とさるもめとあふどほふれ

甘露亭
道遠

大は方花とよむりも此と人
風くくうあくちりりー

福
繁門

白猿乃えんてん文字を清くして
け世伝もやうくさるるあき

二橋亭
高記

あは魂へくふり花の立鳥帽子
素袍のしもわくみあうる

一粒亭
萬盃

予あへぬ袖の後のうぐれれを
百も編了お珠乃おやわ

浅流菴
清志

海を藏り手向は志きと堂切
いよくくふ乃きくくそあね

浅月堂
春人

あをくや功あり甲金も名を遊
今年け世伝乃去くくくとい

松櫻菴
高人

○ 蒼本の不さり出もえくものを
うりくも暮かありと焼香

浅草菴
市人

○ 二途川氷もさけんもく名を
おひきけ人のあつと後り

立川連
松根亭
武将

十目に見る念伴の百首くじ
宗吉の指とさす下なり

鳥亭
競馬

○
大悟の壁子向島の閑をたのめしとて八閻浮提
内の大立者大極上品のうそふ登りての極樂
世界の卷頭ちり七拈華微笑の鼻をひねりて
嗚呼つらもあそ人のちりあを残を目八と八と六十
四海の名人无常遷流の早かりをどりまさるめや
かみしむさうそや
山東京傳

笠塞の目乃あありてまられ白猿の

祖父のせりあれ浄土双六

梅川

慈悲成

と〜ちどもあのおの世へ是と川ぬきた
衣襟も〜と〜と六十一六字

有漏路よりいづ物も是も是もや
あ〜ハも柄杓も切丹〜あ

皮舟

桜木

羊好

え〜あ〜や〜と〜増も〜す
あ〜あ〜のぬ〜と〜川〜と〜

打出

巨槌

皆人のを〜心後乃は向の玉
あ〜あ〜乃〜も〜と〜と〜と〜と〜

信友亭

子志美

白猿乃死〜と〜ま〜と〜と〜あ〜の
い〜と〜は〜と〜ハ〜あ〜後〜と〜

極楽の川を渡る舟の揺りま
弘誓の川を渡る舟の揺りま

松石の川を渡る舟の揺りま

暫乃らけん河は流しは掛しき乃
らうんもよきををるはあや魂

玄朱亭

肉墨

白梅の川を渡る舟の揺りま
白梅の川を渡る舟の揺りま

止ま楼

間鷹

わたる川を渡る舟の揺りま
わたる川を渡る舟の揺りま

松風亭

空寐

極楽の川を渡る舟の揺りま
極楽の川を渡る舟の揺りま

西山楼

下住

角乃らき人有りは神を死くし
角乃らき人有りは神を死くし

琴通舎

英賀

錦繪をみる人有りは神を死くし
錦繪をみる人有りは神を死くし

三番叟

早人

志乃らき人有りは神を死くし
志乃らき人有りは神を死くし

龜岩楼

内通

志乃らき人有りは神を死くし
志乃らき人有りは神を死くし

文

穴

内通

定紋乃らき人有りは神を死くし
定紋乃らき人有りは神を死くし

○ 然井をこれのまゝに

今はこれのまゝに

鳳凰堂のまゝに

春江亭

世の中のまゝに

長生館
春明

まゝに

蘭屋

先程のまゝに

長鯨女
鷺洲

柳のまゝに

喜多子

くは

百歩巻
弓太夫

あし

蓮生亭
玉成

江戸市川

浮舟寮
金満

世の中

五岳亭
豊後

西方の縁の修りも名残も
江のちるも流はもとの念の佛

名
楽
館

墓清くもくも湖のそと浪や
あつたももけきもくもくも

浅
江
棧
見
分

志りくもまのそけいもゆきの
あつたももけきもくもくも

松
林
亭
雅
楽

死生の山新の市らる魂らら
あつたももけきもくもくも

石
孤
亭

おのれのついでにゆくかゝる世の眼
あつたももけきもくもくも

そと日本うの建は月〇景は
あつたももけきもくもくも

筑
波
根
峯
頼

あつたももけきもくもくも
あつたももけきもくもくも

紀
字
紀

あつたももけきもくもくも
あつたももけきもくもくも

丘
村
真
人

あつたももけきもくもくも
あつたももけきもくもくも

雲
石
月
渡

白猪のしるしをうしとて
かゝるものあり

これ又傳のうしとて
あつたものあり

松風堂

あつたものあり
あつたものあり

五明亭
巴九

其のしるしをうしとて
あつたものあり

湯水
淳厚

あつたものあり
あつたものあり

青林堂
系尾

あつたものあり
あつたものあり

海菴
未久

あつたものあり
あつたものあり

千歳菴
壽

あつたものあり
あつたものあり

白雀堂
松人

あつたものあり
あつたものあり

一回
綾丸

あつたものあり
あつたものあり

冬舎
蟹子丸

○はく戯場を辞していふ時ふ
隠き風流之時ふ今他色

獨歩菴罍

隠逸乃菊ハコトきててし句ひくう

買明

○茶菴小訪しつらひとあうつま
あひたるえをわし中に忠告
のりをとえつふつま

今ハ世ふふまき玉由良ハ假名来
反古唐をもあひ出さる

鳥亭
鉄馬

又小カ括急も打る斗りあえや満尾はしむと
修例様乃うふことりて

櫻木亦あつる白猿乃りこみ教

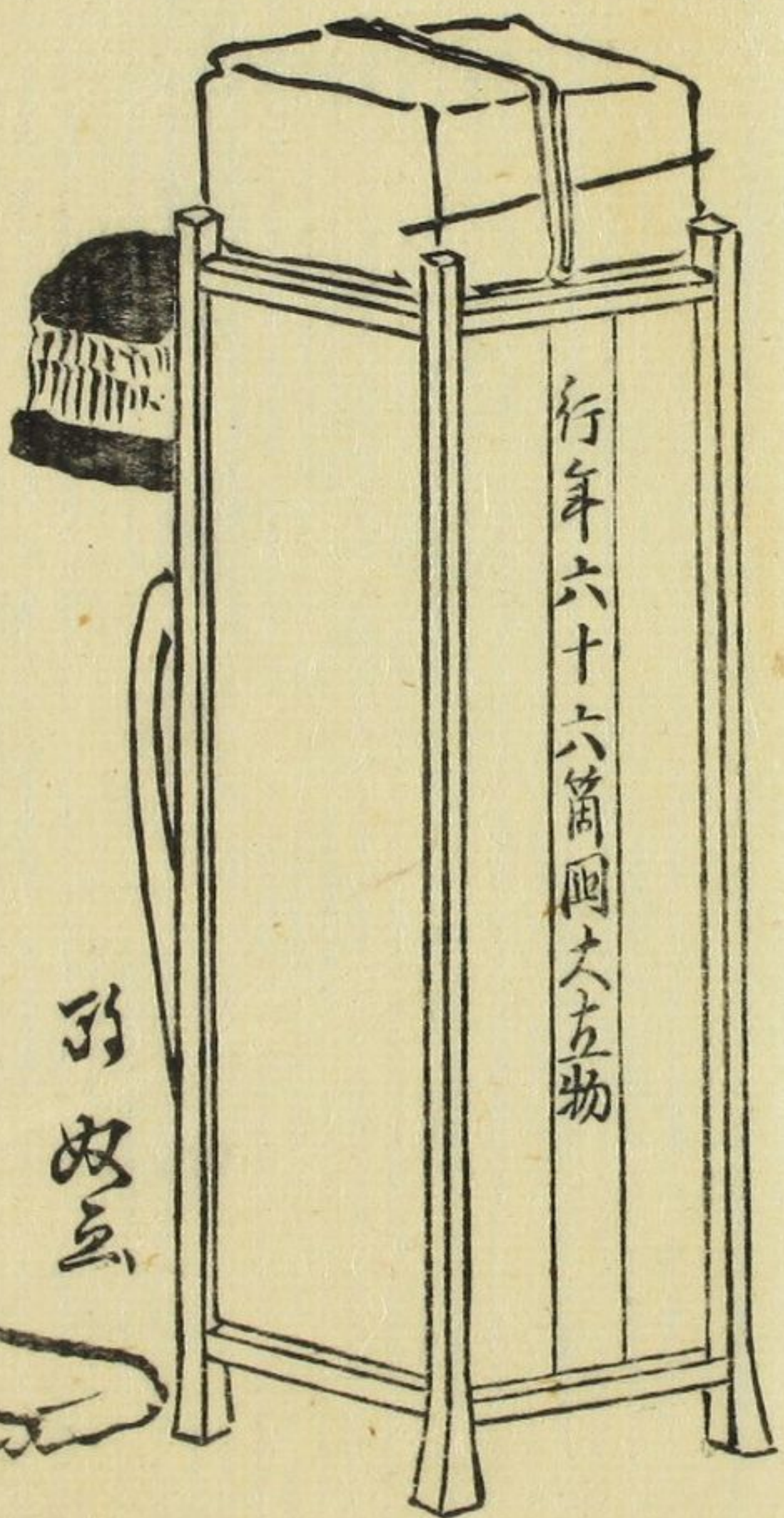
悠々館
侍人

救ま之萬之ふ村余も

○月陰小舎とくつ猿うまわとあり一さ乃か
がやあらん山ろえいあきくことまにさすつら

白猿乃遠行さしその時ハ
月も出がらつどかりのぶらん

談洲様
馬馬



行年六十六箇圓大立物

引ぬえ

千繩五連

紅尾佐丸

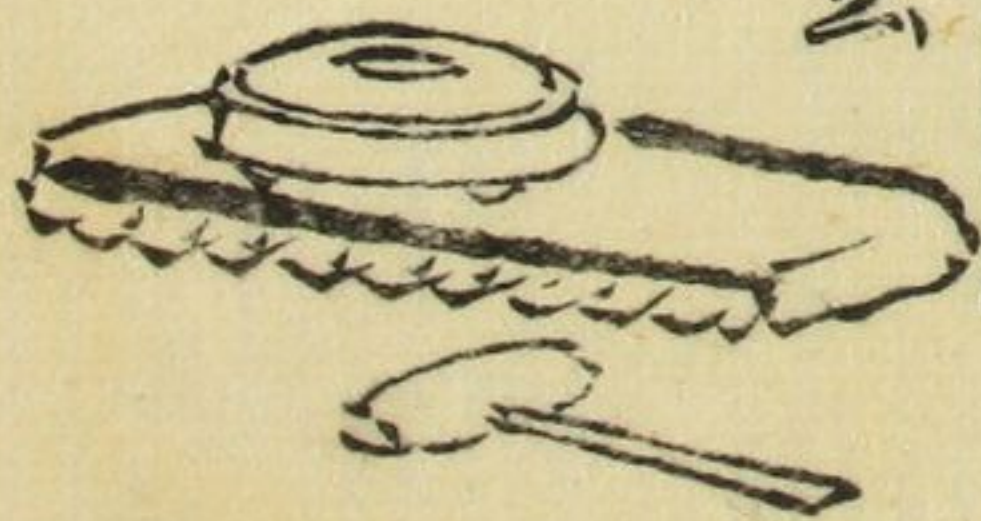
書の上

うしろ百その

しんを

しんを

有る人



白猿の子守歌の事お臥せりて今も
百三十三は縁のやうな終り
とてまきと書きたる大和南の珠教乃歌よ
くうとてし法燈をまきとていさく
るは極らるる碑町といけ人の評判記
に記すやとひるまきとていさく

千繩庵

三院羅法師

大まきと蓮花乃人の

白中樓

歌音乃あまうり

無名とていさく

千繩五連

白中樓

真盛

たのりや奇音のあまうり
あまうり世もまきとていさく

三五亭

はや

名残をいさくあまうり
川く極まらるかぬの息もや

玉危園

桂男

け人のあまうり
極まらるるあまうり

清中舎

十帰

暫のうけもあまうり
あまうり蓮の望むら

手向くさくさ 秋葉のしるふよ
のそきくさくさ ひとりやうさく

衣高水 康凡

竹のもさくさく 白猪と
ほけの圓くはら。修り者

高根 常雪

不死のたひん 五段の初音屋
ゆげも百味乃積とのやきん

此道 宇時

くらくさくさ 百子乃人もしり
南をりゆげ 伝珠の秋玉

本草舎 盛芳

阿得のたひん 傳珠のたひん
ふく極らくのまきくさくさ

芦中舎 丈鼎

ちん戸のたひん けいり
くさくさくさくさくさ

最中 万在

助六乃ちん 乃ちん
おしん けいり 乃ちん

其 仲頼

ゆき 乃ちん 乃ちん
ゆき 乃ちん 乃ちん

五福亭 深丸

はら 乃ちん 乃ちん
今ゆげのまきくさくさ

颯月亭 紫尾

おの圓く入りしり 乃ちん
六十乃ちん 乃ちん

南呂堂 可貫

尾舟

于繩正連

松雨寺

小松風

あつらひ

あまの

伽藍の

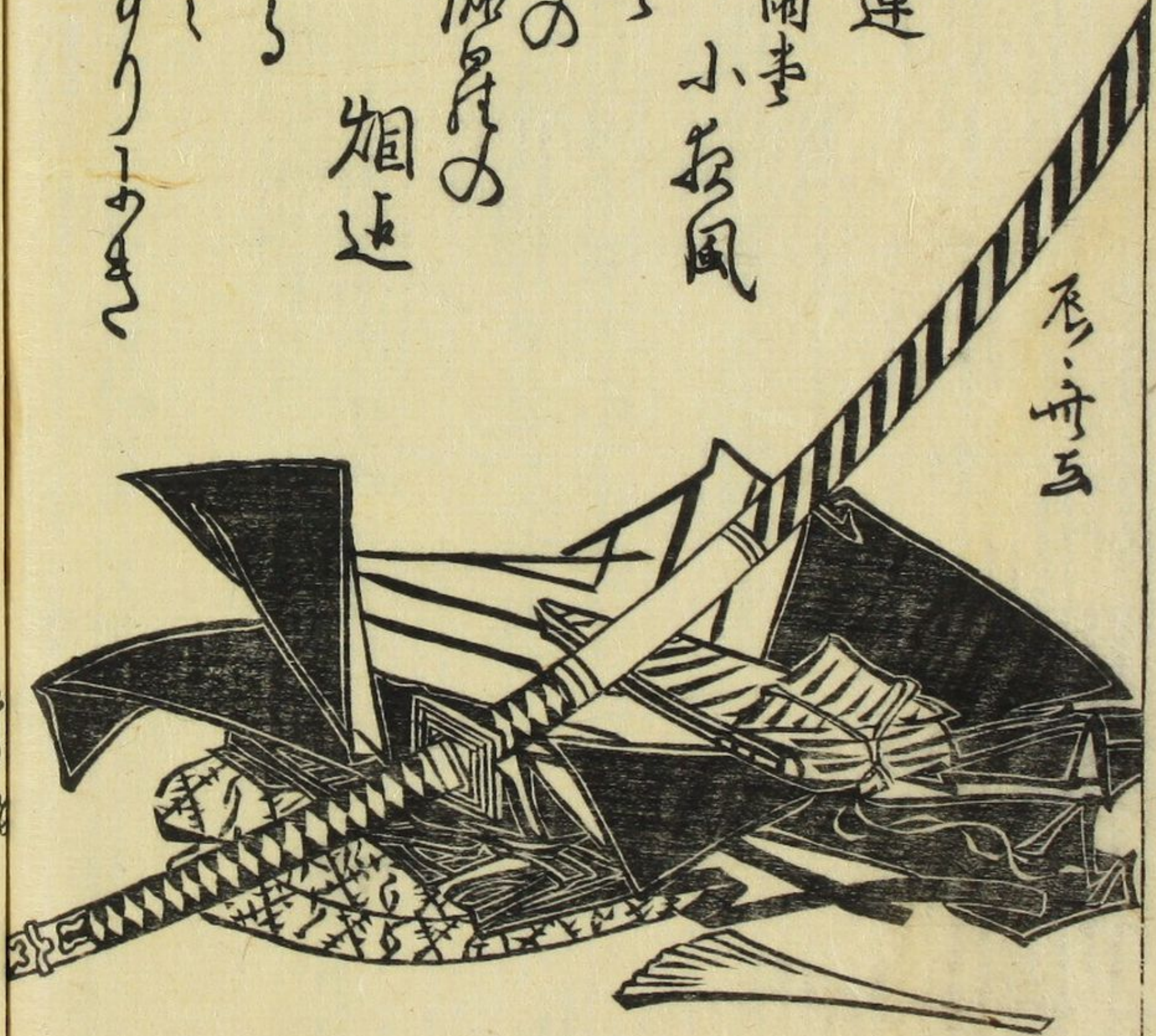
皆

廻道

あつらひ

あまの

あまの



年よりいふる風なりと云ふ牌も
たゞめをいふる人なりありと云ふ

川原

とてや今も切やと云ふ面うけを
はらりしは幕のゆきじ

桃
種成

松雨のうらまきよ又字への縁を
近上の川に幕をひくく不祥との
やまを巻小まゝありと云ふの五種香
くありと云ふしは松雨寺の千五百修ん
たんのは浮判も上品上せうちにて
大極らと云ふ吉とやと云ふん

たつたははせむびさるる乃

あまののたまは
はを似あかん

清亭
和樽

千穂正連

勝亭

山人

金糸の付し

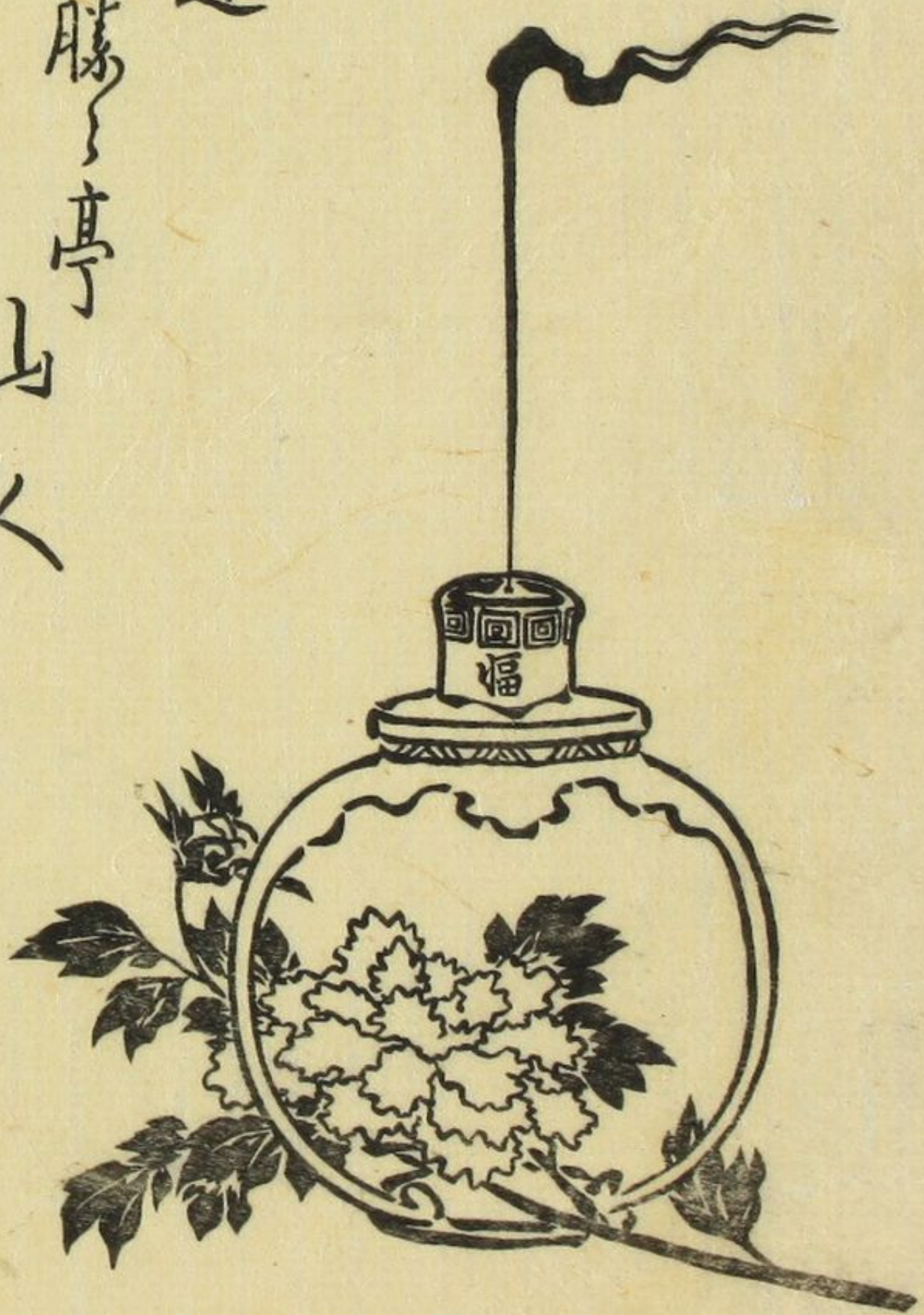
石の付せ

るふれを

たぬ乃ふきの

千両役たる

北野云



○白猿をとくふ賦

青藍窩

蒼々五百崎此わらふ赤あつさ

月雪花乃之川谷なとす

心ハ世の蒸れおのひをまちて

夷曲俳諧を二返多しむ

相歌はト養の舂をまらび

俳諧を晋子くわをいふ

毎常此風ふらふはた乃再

八百はら此入袖をわく

ふと一成田乃御伴は
甘き海たるあひ
みるもあつひ合

銭屋
金埒

後の世ハ
ゆきゆく
うらぶらぶ
るみなるれと

君と
むらぶらぶ
出用帳どや



向島隠居之像
葛飾北齋写之

光陰ハスよふ川矢ぞろろハもや
四十九日ふあさうり 拵と舞

時雨はくぬきせし袖は替紋の
鶴のこやしの雪くくろく

此の世あつて涙よあむ妻の夜ハ
ふと一と舟の志はるれをす

徒然しるし世の人たつととと
る古撰とせんとかり火のゆき

狂言巴法沙河うまつきて世盛の
平家とよりの日向京清

本林羅亭

万象

扇鶴亭

百人

彌生菴

雛丸

秋長堂

物築

与風亭

内記

我多きくわのし具負あきまへ

清冷亭
笑丸

三度くふやとよき行 歌んまも
いせく洞法のくみぞすまふ

思連堂
四

願伽楠丹和歌のこすあへ堂
紅葉ちりううくあ乃筋隈

七珍舎
万寶

あまきつを透頂香も手向を
まけ茶笑きくは系あやとな

鼓腹直
実副

極よる蓮たうてふた本若差
て存うくらも津本基持

守信亭
於古足

白鬚とふまきくも世あうくへ
とーや冥途ふ向く島とち

清風亭
伊佐子

は系たゆうは水と手向あや
ありん来よ入ふ替後乃鯉

五安臺
有恒

廿の人乃とくあ総も人まふ
秋葉のくくやと夢あくらん

大倉菴
金光

招魂の法修す時ふくとつんが
なを味ふた留せゆいま

橘香亭
笑顔

こくぐまうく矢の根五郎よ今名
くくく石の走くあうく

招留亭
二字守

おのひまきわゆる居よあつて魂の
うんぶの成さうんよのとい

還錦舎

安人

清くもふい鼻志やおまはかあふ
紙の成をそと我もわうり

酌酌亭

跡人

御佛の法射子よき海老鎖
見らる人の子進かとうり

檜垣亭

仲乘

うき洞袖も一何のふりしゆく
程言侍語乃死出の山姥

弄月亭

金花

尊ははたきさうきう南を阿虎
急伸百首えんかははまも

桜衣

重丸

さうりやよむ往生くかり
世上の人の皆をうり

松月舎

垂蘿

あさく今をうらむとれはまの
あさくとほまう一人乃すう

鐘声舎

明行

西方へ行一六部の名はれ
念併坂ううりてど見ん

埴生菴

候住

わじとれは大明神も格生は
予舞乃サ喜菩薩とあり

斗葉亭

諸躬

風中ちる雲は親まの世でハ
二度之升とありうり

友垣亭

増成

千両の黄金佛乃々附
今も大極浄土往ぶ中

八算舎

第一

小田原の外郎より先
おはれと云々十萬億土

吟語樓

久住

景清とて親玉はあはれを
せと云々念件尋寸とよべ

天

宮音

之界を云々といふも云々や
生死流轉乃云々云々
今云々のや云々云々

黄金

多丸

定も云々生死流轉乃云々

云々云々
云々云々

海濱亭

長廣

子向歌うれ乃素袍のあき
之升も紋ののらふを云々

膝伴

團江

爰佛乃彌陀乃浄土へ行
六十の部むけのらぬ道

女々

足兼

江戸中の洞乃玉と数珠ゆて
百萬へんも念件ト云々

鳥姿樓

音好

ぬすめあつ今一度の對面
と云々も名を云々別海

茂林菴

白狸

花道のつゝ能舞臺に敵役
らどき尋しむし思

市川乃水上下乃出立

滝本 鯉丸

江乃花おくらい草も望こころ
月の鏡ぞのらふ菴崎

唐織 綾丸

月花とくろふつきくも忘れ
冥途へ行く 臺遊法子

最中 月丸

黄金乃舞臺小居心は世ら
あまこゝろに乃蓮華座取

徳井 富志丸

親玉は死とす 其日あり
月とわたりし 細ねぐさ

雲鳥 綾人

其のあゝこの梅とをく 秋乃夕
月とわたりし 今ハそのうきをこにとく
やうに甘びうしを学ば痛ひし 仲のきき者
とふやうべのこおとまををありんありし
このハ今もわくあつてあつてあつてあつて
之度ふふや 其時より思ひ出
花をふる目と月よ 麻ぬ夜も

松俊

親玉をりとは名物 大あまふ
しとありし 後金え出

五味 莊二

蓮葉へふふ乗込乃手打連
ふ手取書文珠 出りりら

前川 玉成

はるあゆく道とへくさくさくは
きせしききききききききき

木村連
王虫

織人

光陰のまの根立郎もさあ
浮世のまをともとゆひりあ

花鳥堂

砂樂

あさくさよききききききき
武通さあさあさあさあさあ

百餘齋

志解田

江戸中ふみりく洞乃もさあ
きりて浄土の花とさあきん

鹿杖

鹿師子丸

浪花追まききききききき
世の形くちやめな後狂言

浪花
青園

廿五坊

仲藏がよりさあとおのさあ
つひはゆらると南無阿弥陀佛

尚左堂

俊満

極樂乃新ね言と一つさあ
賣外郎さあさあさあさあ

黄茶亭

軸丸

まどくくとさあゆら初ざい
あさくさよききききききき

田舎

妹輔

舞臺でハサききききききき
人。併よ今ききききききき

玉鉾

三千丸

とさくさあさあさあさあ
ひき立後く南無阿弥陀佛

東々

色好

秀雀が方よりいけり今又今合併百首
よききき極本共舞臺に因産せりるれいりる

○
うらた後する鬼と云ふおひの書で
くち極ふへ通る花とら

愚案齋

百八乃救珠あまの徳と報むも
今もなき仲のくちとら

楓
秋人

あぢさふや番はくちとら
ありまきく人洞とら

友
仲好

蓮枯しはくちあ徳と格ふへ
ゆりあやむ花のまか

若松
伸入

はくちのちやもめとら
公松言る舟はくち

入船
風好

○
先づらら一才子達のこゝろ
百万遍乃救珠はあや

筆
鳥堂

虚空よりある花道と格ふ乃
西の棧もくち

不破
関人

年もはくちのちやもめ
こけしとら

三國
雪成

あのかみくち金箔つとら
深江乃降土乃佛とら

角部
獅丸

土づくとらかまのちやもめ
今ハ仲やあや田とら

深江
菅道

とくし知ど母意常此風よ不波との
まがき
新石丁

そのまは姿紙やう世紙をふれ
水車亭
水たろ

牛形も若た彦よやどりはし
青陽舎
白馬

極ふよは親見世の初おまを
松柳舎
恒産

袖ふふもくひはする時雨が
越後高田
壺仙

○
うらびる古菴の梅うりぬとく法君をよ乃
ふ白ゆふしこの葉をささるさくさくこれ一樹の
蔭にふとちるつら乃ふふもあつたそよひに
あつたや侍人うしれそよもあつたそよひに
はつたよた華はくさつて生を侍る寄

わんまのあまのなま

執筆

母櫻子

まろちとらまの
目ふふとや

ね乃

よふと

贈臺遊法子

白猿高評判萬客惜親魂
可憐冥途使百首爲誰言

松秀一名 滿幕希玉題



數珠親玉集跋

淳名片片す病氣見舞ふ八万中乃夜食を
とくふ一之文軒先生の上下講中より之萬
餘人の強敵に盛出たり一之飛ぶ上権者乃
治せり或ハ將軍に光るも流ひて不可
思議なるハ此翁家ハ権とが隣ホあ絶ぶ
りといふ事権者に汝法もよく文相地蔵の
中子ふびし勝軍地蔵乃おし道もよくて同様の
害腫と濟く六十日成田乃用帳のどくは合
蘇式の供被とつて此翁の十所診官乃

行列うらも野一とんを字名やとて案入

親方の高麗を極金をはげちりして位牌を
かづき香爐をこもぎさるに出入りは居
詞の里の子侍法吞太郎乃類ひまが編笠を
のぞれ杉戸をこもぎさる押入る寺門の成敗棒
ふりればやせびよる唯うきんちやん
さいの中句の唱樂のちぎよひのうらとほ雲
かこれどく雲乃上よおちよと見え抜く坐
俳優すんくも向依讀短尺燗香のあひ
親玉くともを引道母の時東西くと制す

よ川えんごんは是ぞりれ頼以此功德念佛百千
一ころ百もく残るあは仕合者とも名物とも
こんふ後者ぞ唐もある東夷南蛮西
戎北狄大地乾坤のあつととあは浄土
乃本舞臺へ還る新糸の花とよもき誠り
権代つわぶとあるとちどやし名はる本名は還譽
淨本皇遊法子眠りの夢はこふより追善は
次第多くハ万ハを夢見物のちのちと悉く并
止ぬす逝者ハかくのごとく息子の勢ハ自ら乃
こころごとく又環はるる名はこころ五十年
息百の思多ううてささえぬ百の遍教遊乃
親玉は音頭とく談冊樓の責念併例の
りりちりして穿力致恒生の顔とるん

江戸中がさしむ渡ど玉本屋と
わきいげにや乃家内をうりの

菴崎ふらひある入の
さとち茶ハこの仕暮しと
うしやありきりれ

追加

○ 如夢幻泡乃世非身と云はれ

青虹亭

風子とや松枝れちつき折是 九所

月よみ孫多之井も冬に破れ扇 吟洲

○ 今も剛や矢の根とつてもとひ出を 文東

○ 若君乃贈りつる玉珠のあゝとき 市川七代目 三井

ぢんねは寄みとぞくまてとくまむのあを
孫の手はくまてくまてとくまむのあを

文化四年丁卯孟春

江戸橋四日市

東都書林

石渡利助版

かみくいのとれ、自毫の

つる

司馬河内院佛

文無世五年二月十日

日

東都書林

